



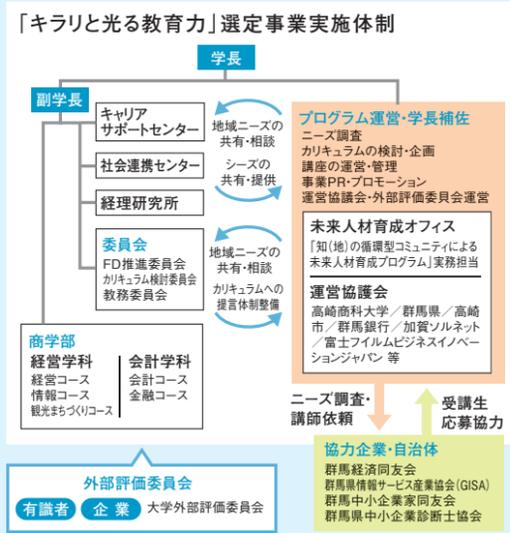
キャンパス / 群馬県高崎市 学生数 / 933人
 建学の精神 / 自主・自立
 学部 / 商(経営、会計)
 大学院 / 商学
 経営 / 学校法人高崎商科大学
 他の設置校 / 高崎商科大学短期大学部、高崎商科大学附属高等学校、高崎商科大学佐藤幼稚園

学部と定員、教育の取り組みの変遷 (短期大学部含む) 青字はその年度に改組、定員の変更があったもの

年度	2005	2012~2016	2017~2023	2024	2025
学部学科 ※()内は 入学定員	流通情報 学部 流通情報 学科 (200)	商学部 商学科(200)	商学部 経営学科(130) 会計学科(70)	商学部 経営学科(130) 会計学科(70)	商学部 経営学科(130) 会計学科(70)
収容定員	800	800	800	800	800
教育の 質向上に 向けた 施策		▶ 高大連携事業Haul-Aプロジェクト開始(2012) ▶ COC事業採択。地域連携センターを設置し地域に根差した大学であることを再定義(2013) ▶ 3.5本の矢プロジェクト*3開始(2016)	▶ 商学科を経営学科と会計学科に改組(2017)。経営学科は企業連携、会計学科は公認会計士というコンセプト ▶ 教職課程情報免許課程開設(2022) ▶ MDASH(数理・データサイエンス・AI教育プログラム)認定(2023)	▶ 100分授業導入 ▶ 短大に新カリキュラム導入 ▶ 短大にクォーター制導入	▶ 短大の現代ビジネス学科を経営学科に名称変更 ▶ 短大の収容定員を240名から200名に減へ
学生 募集上の 施策	▶ 志願者数 245人	▶ Haul-A特待入試*4導入(2012) ▶ 志願者数は徐々に増えるもの の入学定員充足率は78% (2013)	▶ 企業と開発した育成型入試「総合型選抜 探究・ブレインストーミング型」*5導入(2020) ▶ 2020年以降志願者数が800~900人強になり、15年前の3.4倍に。入学定員充足を果たす	▶ 志願者数921人	▶ 学校推薦型選抜全国児童養護施設推薦制、数理・データサイエンス活用制導入 ▶ 短大にて総合型選抜 将来未定型(通称モヤモヤ入試)導入
経営 改革	▶ 人事考課制度導入(達成目標と行動目標の達成度を給与に反映)	▶ 5か年中期計画(2015-2019)を策定し、学部学科の再編による学修の深化や、COC事業の推進による地域志向へ(2014) ▶ MVV(Mission, Vision, Value)&ブランディング戦略策定。ミッション、ビジョンを明確にして明文化し、建学の精神「自主・自立」を今の言葉で解釈する作業を行う(2014)	▶ 20周年事業「toTUC計画(ブランディング計画)」スタート(2019) ▶ 5か年中期計画(2020-2024)を策定し、学修成果の可視化による教育の質保証やブランディング戦略策定(2019) ▶ 事務局の庶務フリーアドレス化(2021) ▶ 役割別基準項目表導入。学園が求める業務レベルを役職別・段階的に決め、人事考課等に活用(2023) ▶ オンボーディング研修(新人・中途採用者の職場適応・戦力化研修)見直し(2023) ▶ 学内サイン見直し(2023)	▶ 地域や企業との連携活動、地域の小・中・高への教育支援をワンストップで取り組む社会連携センター設置 ▶ 「少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援」事業採択 ▶ 目標管理制度を改定し、個人目標を中期計画や年度方針からブレークダウンして設定する方式に改定	▶ 週休2日制開始

注目 「自分が大学を変えられる」という意識を醸成し、
 大学の変革に挑む組織づくりへ

「これからは、変えることがリスクではなく、変わらないことがリスク。そのため、変えることや新しいことに挑戦する意識を学内でいかに醸成するかが大切だ」と森本理事は話す。土曜日の勤務時間の見直しや週休2日制の導入は、「自分で変えられた」という実感を持ってもらうために職員の意見を反映して実現した。同時に、役職別に求める能力を明確にし、人事考課制度への活用を図るほか、研修制度も拡充している。そのような組織づくりもあり、今回、採択された国の経営改革支援事業計画は、学内から公募で募り、立候補したメンバー中心に進めた。というのも、申請業務は、業務負担が大きく、高いモチベーションがないと完遂が難しいからだ。さらに、採択された場合は報奨金を出すようにした。手を挙げたのはベテランの教員1名と、職員2名。森本理事と経営企画課の職員2名が加わり、地元企業へのヒアリング調査やアンケートを行って事業計画を練った。職員の奮闘はもちろん、教員が関わったことで、教授会における説明に説得力が増し、協力が得られやすくなったという。



*3 企業連携教育 *4 全国の協定を結んだ商業高校に、高度会計育成プログラムを無償で提供。そのプログラムに参加した優秀な生徒向けの学校推薦型選抜
 *5 ブレインストーミングを原動力に、革新的な事業や人事制度を打ち出すIT系企業面白法人カヤックと共同開発した入試。2次試験で、受験生同士があるテーマについてアイデアを出し合うプレストを行う

群馬のリスキリング市場に挑戦し
 “生きた実学”で大学の価値向上へ

CASE
 STUDY

高崎商科大学

「少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援(メニュー1)」に採択された高崎商科大学。申請の狙いと、大学存続に向けた戦略を理事に聞く。



理事・法人本部本部長・学長補佐

森本 圭祐

もりもとけいすけ ●群馬銀行を経て、2004年高崎商科大学・短期大学部入職。キャリアサポート室長、教学課長、事務局次長等を経て、2021年より現職。桜美林大学大学院国際学術研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。

今こそ、人口減少に向けて
 経営の転換を図るとき

近年、本学は、教育改革と入試広報の努力により、志願者は増加し、他県出身の学生比率を3割強まで高めました。しかし、県内の18歳人口の大幅な減少と東京への流出拡大は、深刻な課題です。入学者の7割弱を県内出身者が占める本学にとってこの問題は大きなインパクトがあり、県内の人材育成上も、本学が淘汰されることは地域にとってデメリットになり得ます。経営強化のため、新しい市場への挑戦は、超えなければならぬ課題でした。

このような覚悟のもと、今回の国の経営改革支援事業に採択された*1事業では、「リスキリングによる県内社会人の成長」と「実学教育による学生の成長」を同時に行うことで経営と教育の構造転換を

県内企業人向けの教育を
 学生の教育にも生かす

リスキリング市場の現状は、大半を民間企業が担い、大学はわずか1割程度。大学による今の社会人教育は、産業界のニーズに合っていないのです。この現状を切り開くべく、地元企業のニーズを徹底的に調査しています。県内では中小企業が多いため、そもそもリスキリングという概念がない、人事部門もない、これから必要なスキルは不明...と、さまざまな課題が見えてきました。そこで、最初の1、2年は、受講者同士のディス

カッションに重きを置く講座を開講し、さらにニーズを探っていきます。また、講座には学生も参加させ、学んだ理論がこの先どのように実践されるのか、「生きた実学」に触れることで学習効果を高め、その成果をカリキュラム改革にも活用していきます。加えて、地元企業人を知ることでの学生の地域定着率の向上も期待しています。

生き残りのためには、教育の質向上とブランディングにトライし続けることが大切です。そのため、本学では、自分の意見、行動で大学を変えていくことを促す風土づくりに取り組んでいます。今回の補助事業の企画も、教職員の立候補者中心に進めました。

18歳人口が減少した分、定員を削減すれば、S/T比が改善し、教育の質が向上すると言われていますが、そんな単純な話ではありません。教育環境を整えるには、ある程度の定員規模に基づく経営体力が必要不可欠です。その意味で、市場は多角化したほうがいいし、定員はむしろ増やしたい。今後、大学院のカリキュラム改革も予定しており、地域で一定のニーズがある短大についても、ブランディングと教育内容の工夫次第で、十分に存続可能であると見込んでいます。

「これからは、変えることがリスクではなく、変わらないことがリスク。そのため、変えることや新しいことに挑戦する意識を学内でいかに醸成するかが大切だ」と森本理事は話す。土曜日の勤務時間の見直しや週休2日制の導入は、「自分で変えられた」という実感を持ってもらうために職員の意見を反映して実現した。同時に、役職別に求める能力を明確にし、人事考課制度への活用を図るほか、研修制度も拡充している。そのような組織づくりもあり、今回、採択された国の経営改革支援事業計画は、学内から公募で募り、立候補したメンバー中心に進めた。というのも、申請業務は、業務負担が大きく、高いモチベーションがないと完遂が難しいからだ。さらに、採択された場合は報奨金を出すようにした。手を挙げたのはベテランの教員1名と、職員2名。森本理事と経営企画課の職員2名が加わり、地元企業へのヒアリング調査やアンケートを行って事業計画を練った。職員の奮闘はもちろん、教員が関わったことで、教授会における説明に説得力が増し、協力が得られやすくなったという。

*1 令和6年度少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援(メニュー1:キラリと光る教育力)に採択された「[知(地)の循環型コミュニティによる未来人材育成プログラム]」
 *2 「[地(知)の拠点整備事業]」。高崎商科大学は2013年度の同事業に採択された

取材・文 / 本間学 撮影 / 荒川潤